

看護職部門

看護職部門 優秀賞

ありがとうの使命

ふなこし いおこ
【岩手県・舟越五百子】

東日本大震災後、1カ月が経過していた。沿岸の中学校の救護所には、その日もたくさんの人が訪れていた。深いしわが刻まれた顔、静かに澄んだ目、日焼けしてふしくれた指、思いやりのある語り口。ああ、今日も大好きな岩手の人がいっぱい！

その人は少し恥ずかしそうに「風邪をひいてしまったので、薬をもらえればと思って…」と、うつむきがちに言った。雪が降り積もる中、仮設風呂設営のお手伝いをしていた。私はいつも通り「今までにかかったご病気は？」「お薬で気分が悪くなったことは？」など、簡単な問診を進めていった。

するとその人はためらいがちに「リンパの病気で…。もう頭だの、肺だの、体中にとんでるって言われてる。盛岡の病院さ入院したんだけど、もうできる治療がないからって。地元の病院さ紹介されて、退院して薬飲んでんだけど、みんな津波に持っていかれた。まんつなあ、残り1カ月だっただけになあ」と語った。

私はドキリとして声を失った。日々、悪性リンパ腫の患者さんと接していた私には、その人が近々たどるであろう道筋が浮かんできた。そして「人のお世話をしている場合じゃないでしょう。自分の方がずっと大変じゃないですか!」と正直思った。それでもやっと「ご病気もお持ちの上に、津波で大変でしたね。仮設風呂は外の作業ですか?」という言葉、口からひねり出した。

その人は「おなごさん達も入るからって、俺には外の仕事をしろだってさ」と言って、顔をくしゃくしゃにして笑った。それから少し神妙な面持ちになって「俺に贈られた最後の仕事だと思っている。皆が喜んでる顔を見ているとうれしくてさ」と付け加えた。その瞬間、私には「使命」という言葉が降ってきたように思われた。

その人は薬を受け取ると、大事そうに胸に抱えて「来て良かった。いつも遠くからありがとう」と言った。私は思わず「ありがとうございました」と答えて、涙をのみこんだ。